

「職業奉仕」はロータリーの根幹か？

日本のロータリー 100 周年に向けて考えたいこと

日本のロータリー 100 周年委員会
ビジョン策定特別委員会委員長 本田 博己 (前橋 R C)



はじめに

今月は、「職業奉仕月間」ですね。多くのクラブで「職業奉仕」に関する卓話が予定されていることと思いますが、本稿は残念ながら、そこで期待されるような高尚な話ではありません。「職業奉仕」を否定する(?) ような本稿のタイトルに違和感を覚える読者もいらっしゃるかもしれません。

本稿では、日本の伝統的(?) な「職業奉仕」という言葉に関する議論に対する私の疑問と、そうした不毛な(と私は思っているのですが) 議論を克服していくための私見を申し上げます。しばらくお付き合いください。

クラブの奉仕部門の一つとしての「職業奉仕」

私は、かつて「四大奉仕」(今では「五大奉仕」になりました) の中でも「職業奉仕」は、具体的な奉仕活動を伴う他の奉仕部門とは違い、奉仕の理念の職業への適用を謳った「ロータリーの目的」の第 2 項目に通じる、他の奉仕部門の上位概念のようなものではないかと思っていました。「四大奉仕」の一部門に収まっていること自体がおかしいと。

しかし、どうやら日本以外(?) の世界のロータリー

では、当然のように「職業奉仕」を他の奉仕と並ぶ、一つの奉仕部門 (an Avenue of Service) として位置付けているようです。

「五大奉仕部門」の定義が、国際ロータリー (R I) (第 6 条) 定款や細則には掲載されず、標準ロータリークラブ定款にだけ示されているのは、それが、その定義の前文で明記されている通り「個々のロータリークラブの活動のための枠組み」(framework for the work of this Rotary club) であるからです。そこには、ロータリークラブ会員が各奉仕部門で行うべき行動・活動が示されています。

第一部門の「クラブ奉仕」では「行動」、第三部門の「社会奉仕」では「取り組み」、第四部門の「国際奉仕」では「クラブの活動やプロジェクト」、第五部門の「青少年奉仕」では「活動」、「プロジェクト」、「プログラム」などという言葉で、具体的に会員やクラブに行動を求めています。

ところが、第二部門の「職業奉仕」は、これまで、記述が他の部門とは明らかに異質でした。クラブの活動の枠組みであるはずの「奉仕の第二部門」としての説明が欠落していたのです。しかし、2016 年の規定審議会で「制定案 16-10 奉仕の第二部門を改正する件」が採択され、標準ロータリークラブ定款第 5 条の奉仕の第二

2016 年規定審議会



部門である職業奉仕の定義に、アンダーラインの部分が追加されました。

第6条 五大奉仕部門

2. 奉仕の第二部門である職業奉仕は、事業および専門職務の道徳的水準を高め、品位ある業務はすべて尊重されるべきであるという認識を深め、あらゆる職業に携わる中で奉仕の理念を実践していくという目的を持つものである。会員の役割には、ロータリーの理念に従って自分自身を律し、事業を行うこと、そして自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てるために、クラブが開発したプロジェクトに応えることが含まれる。

これで、「職業奉仕部門」も含めて5つの奉仕部門すべてが、クラブの活動の枠組みであることが明確になりました。

V T T (職業研修チーム) も「職業奉仕」!

日本のロータリーで言い習わされている「職業奉仕」という言葉と、R Iが考える「職業奉仕」の違いがはっきりわかる例として、『手続要覧』に載っていた「職業奉仕月間」の解説を見てみましょう(『2013年 手続要覧』P 89)。

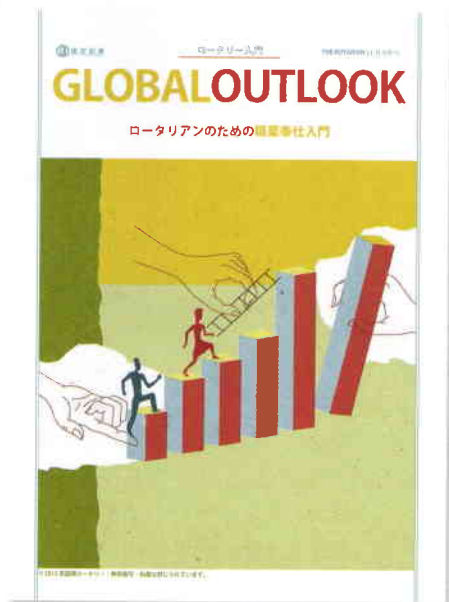
職業奉仕月間 (Vocational Service Month)

毎年10月(*2015-16年度から1月に移動)の「職業奉仕月間」は、クラブが職業奉仕の理念を日々、実践することを強調するための月間である。この月間に推奨されるクラブ活動には、地区行事でのボランティアの表彰、ロータリー親睦活動への参加の推進、職業奉仕活動またはプロジェクトの実施、未充填の職業分類に焦点を当てた会員増強の推進などが含まれる(『ロータリー章典』8.030.3.)。

いかがでしょうか。「こんなものは職業奉仕ではない!」というベテラン会員の声が聞こえてきそうです。地区やクラブの「職業奉仕委員会」の委員長や委員に任命された方は、シニアリーダーが伝統的に語ってきた「職業奉仕」論とR Iが提示する「職業奉仕」とのあまりの違いに困惑したことがあるかもしれません。

ロータリー理念の根底に「職業奉仕」を位置付ける日本の伝統的議論とは異なり、R Iが示す「職業奉仕」は、クラブの活動の枠組みである五大奉仕部門の一つとしての「職業奉仕部門」なのです。

世界のロータリーでは、ロータリー財団のグローバル補助金を使って行うV T T(職業研修チーム)も立派



な「職業奉仕」の活動として認識されています。(『友』2013年11月号横組みP 35~42「GLOBAL OUTLOOK ロータリアンのための職業奉仕入門」、『The Rotarian』2013年11月号P 63~70参照)

世界のロータリーでは、自分の職業上のスキルを生かした奉仕活動は、個人が行うものであれ、クラブが行うものであれ、すべて立派な「職業奉仕」の活動として活発に実践されているのです。

「職業奉仕」という言葉で、世界のロータリアンは、奉仕部門の一つとしての職業奉仕の活動を語り、日本のロータリアンは、「奉仕の理念」の職業への適用や自分自身の職業観を語る。このズレを解消できないでいることが、大げさに言うと世界のロータリー運動の中で、日本のロータリーの「ガラパゴス化」を招いている一因のように思えます。

日本の「職業奉仕」論は、「職業倫理」論

日本の「職業奉仕」論がすべて間違っているとは言っていないわけではありません。

日本のロータリアンが得意な「職業奉仕」論は、世界では「(職業)倫理」“(Vocational) Ethics”というテーマで論じられています。ロータリーは、職業人の集まりというその成り立ちから、昔も今も職業倫理を大事にし、強調する集団であることは間違いありません。

1915年に制定された「道徳律」(「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」)は、当時、多くの業界で職業倫理の向上に大きく寄与しました。現在の「ロータリーの目的」(R I定款第4条、標準ロータリークラブ定款第5条)の第2項には、「職業上の高い倫理基準を保ち、……」^{うた}と謳われています。4か条からなる「ロータリーの行動規範」の第1条には「個人として、また事業において、高潔さと高い倫理基準をもって行動す



ジョン F. ジャーム R I 会長

る。」とあります。

ジョン F. ジャーム R I 会長は、就任前のインタビューで、「全てのロータリアンが持つべき、中核となる資質と人格とは、どのようなものでしょうか？」という問いに、「最も大切な中核的価値観は『高潔性』“integrity”です。高潔性がなければ何も無いのと同じです」と答えています。（『友』2016年3月号横組みP 22～25「約束を守り抜く人 国際ロータリー会長エレクト ジョン F. ジャーム氏に聞く」）

高い職業倫理感を持った高潔な人格がロータリアンには求められます。日本の伝統的な「職業奉仕」論はこのことを強調しているのだと思います。

私の提案：「奉仕の理念」を語ろう

日本のロータリアンと世界のロータリアンが語る「職業奉仕」が違うことを認識している方は多いかもしれません。ただ、その違いを、日本の「職業奉仕」の理解の方が正しいとしたり、「職業奉仕」は他の奉仕部門とは違うとして、クラブの「職業奉仕」の活動を否定したりする態度は、間違っていると思います。

私の提案は、「職業奉仕」という言葉で「奉仕の理念」（の職業への適用）や自分の職業倫理観を語ることをいったんやめてみたら、ということです。

そして、クラブの活動のための枠組みである「五大奉仕部門」（Five Avenues of Service）の第二部門

（second Avenue）である「職業奉仕部門」の活動だけに「職業奉仕」という言葉を使ってみたら、という提案です。

「職業奉仕」という言葉ではなく、世界共通の「奉仕の理念（奉仕の理想）」（The Ideal of Service）という言葉で、ロータリーの理念についての議論を深めていこう、というのが私の提案の真意です。なぜなら、ロータリーの目的は、奉仕の理念を奨励し、これを育むことであり、「奉仕の理念」がロータリーの根幹であるからです。

そのように「職業奉仕」の捉え方を切り替えなければ、いつまでたっても、世界のロータリーとの溝を埋めることも、対話することもできません。

6年前、東日本大震災という大きな出来事に直面した私たち日本のロータリアンとクラブは、被災者や被災地区の支援に全力を注ぎました。そのとき私たちの心を突き動かしたのは、「職業奉仕」という言葉ではなく、ロータリーの「奉仕の理念」だったのではないのでしょうか。

私は、ロータリーの「奉仕の理念」は究極の利他主義であると考えていますが、東日本大震災の時に見られた、日本だけでなく、世界中のロータリアンから寄せられた支援の手や思いやりの心に、世界を変えるロータリーの力と「奉仕の理念」の可能性を確信したのです。

伝統的「職業奉仕」論を超えて

「職業奉仕（Vocational Service）」という言葉がロータリーで使われるようになったのは、1927年、ベルギーのオステンド国際大会で「目標設定計画」（The Aims and Objects Plan）が採択され、「四大奉仕部門」がクラブの管理運営の基本的枠組みとなった時からです。



1927年、ベルギー・オステンド国際大会 Courtesy of Rotary International

「職業奉仕」という言葉が存在しなかった時代のアーサー・F・シェルドンの「Serviceの哲学」を「職業奉仕」で語ったり、「Vocational Service」という言葉から天職論や職業倫理の要素だけを強調して語ったりする議論は、ちょっと強引なのではないでしょうか。

日本の伝統的「職業奉仕」論で培ってきた「職業倫理」や「高潔性」に関する日本のロータリアンの智恵を、共通言語の「奉仕の理念」で世界に発信していくことが重要だと思います。

世界のロータリーとの対話を通して、ロータリーの「奉仕の理念」とその実践について共通認識を醸成してゆく姿勢が必要です。そして何より、「奉仕の理念」を語るだけでなく、その実践が大事であることは言うまでもありません。

日本のロータリー 100周年に向けて

今年度のジョン・F・ジャームR I会長は、各地の地区大会に寄せたR I会長メッセージの中で、「今ロータリーは、いわば転換期となる歴史的に重要な局面に立っています」と、ロータリーの現状認識を表明しています。R Iも日本のロータリーも、地区もクラブも、いずれも大きな転換期を迎えており、将来のための新たなビジョンが必要とされている、ということだと思います。

これは私見ですが、現在の日本のロータリーとR Iとの間には残念ながら不幸な現状があると考えています。日本のロータリーは、世界全体のロータリー運動の中で、大きな潮流や変化に取り残されているように見えます。R Iの方向性や現状に疑問や不満を感じる日本のロータリアンも増えており、このまま意識のギャップが拡大していけば、日本のロータリーがロータリー世界の中で孤立していくことが懸念されます。

日本のロータリーはこれからどのような方向に向かおうとしているのか、が今問われているのではないのでしょうか。戦略計画や補助金モデル（未来の夢計画）に象徴されるR Iの方向性に背を向けて日本独自の孤立路線を歩むのか、それとも世界的ネットワークの重要な一員として、理念と活動の両面で21世紀のロータリー運動にリーダーシップを発揮できるようになるのか、二つの道のどちらに向かおうとしているのか、大きな岐路にあるのではないのでしょうか。

日本のロータリーが100周年を迎える2020年は日本のロータリーの将来の方向性を定めていくための大き



日本のロータリー 100周年委員会 第1回会合 2016年6月30日

な節目の年になると考えています。それは、ロータリーの理念と実践についての日本のロータリーのビジョンを、世界に向けて宣言・発信する絶好の機会ともなるでしょう。

日本のロータリーの現状と課題を明らかにし、全国のロータリアンの合意を形成しながら、世界のロータリーに発信できる、日本のロータリーの希望あふれるビジョン（将来像）を描くことが今求められているのではないのでしょうか。

終わりに

2016年7月に日本のロータリー100周年委員会（委員長は北清治R I元理事）が発足しました（『友』2016年9月号横組みP 40～41参照）。私は、100周年委員会の「ビジョン策定特別委員会」に、第2620地区の志田洪顕パストガバナー、第2680地区の大室儼パストガバナーとともに参画しています。

世界のロータリーと共鳴できる日本のロータリーのビジョンを検討するとき、世界のロータリーと日本のロータリーとの意識のギャップを示す代表例として「職業奉仕」という言葉の受け止め方を再考する必要があると考え、拙文を寄稿した次第です。

本稿で示した見解は、もっと丁寧な歴史的背景説明が必要なのですが、紙数が足りません。私の見解の根拠は「ロータリー文庫」のウェブサイトで、私の名前で検索すれば、「奉仕の理念」や「ロータリーの目的」、「奉仕部門」などに関する小論がいくつか収録されていますので、ご覧いただければ幸いです。

今回、読者の皆さまが聞き慣れた「職業奉仕」論とは異質の文章を寄稿するのは、私にとっていささか勇気があることでした。「職業奉仕月間」に拙文掲載を決めた編集部にも敬意を表します。

第2840地区（群馬県）2013～14年度ガバナー